



DTM・デジタルレコーディングライター
藤本 健 監修
(DTMステーション)

Ableton Live 9 Lite

クイック・リファレンス

本書内で使用している「付属オーディオ素材」は、以下のページからダウンロードできます。

<http://inmusicbrands.jp/live-lite/>



ダウンロードしたファイルは ZIP 圧縮されており、それを開くためには以下のパスワードの入力が必要です。

iMj89Live

英数半角文字で正しく入力してください。

ダウンロードした「付属オーディオ素材」を使って、本書の手順で実際に曲を作ってみましょう！

Ableton Live 9 Lite クイック・リファレンス

ここではAbleton Live 9 Liteの基本的な操作について説明していきます。

Ableton Live 9 Liteは通常のAbleton Live 9に機能制限が設けられていますが、基本的な機能はそれほど変わりません。

内蔵インストルメントやサンプル音源、エフェクトを使えば、楽曲制作やアレンジを行えます。

■Ableton Live 9 Liteのインストールとオーソライズ

まず最初にAbleton Live 9 Liteをパソコンにインストールしましょう。インストールが済むと、製品の登録が必要になります。この作業を行わないと、保存や曲の書き出しができないので、インストール後すぐに登録することをお勧めします。

1. Ableton Live 9 Liteをインストール

同梱されたカードをにはAbleton Live 9 LiteをインストールするためのURLが記載されています。サイトからAbleton Live 9 Liteをダウンロードし、インストールを始めてください。

2. Ableton Live 9 Liteをオーソライズ

インストールが終了したら、次にオーソライズ(製品登録)をおこないます。オーソライズにはインターネット環境が必要です。Ableton Live 9 Liteを起動するとオーソライズの画面が表示されます。指示にしたがって進み、カードに記載されたAbletonシリアルナンバーを登録します。



■セッションビューとアレンジメントビュー

Ableton Liveにはセッションビューとアレンジメントビュー2つのメイン画面があります。画面を切り替えて使用することができ、どちらも違う特性を持っています。使いこなせば他のDAW(音楽制作ソフト)とは一線を画す制作が可能になります。

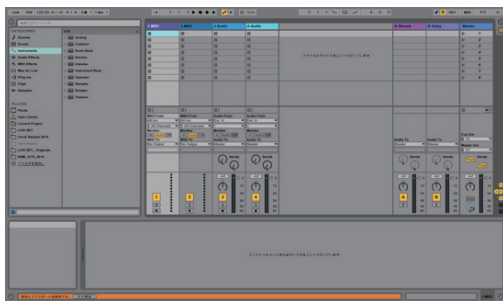
・セッションビュー

Ableton Live起動時に出てくる画面。

トラック毎に並んだ長方形のマスをクリックと呼びます。(下図右)

各クリップには、左端に三角形のボタンが付いており、このボタンをクリックするとクリップのループが再生されます。

また、正方形のクリップ停止ボタンをクリックするとループが停止します。



クリップにはMIDIのピアノロールやオーディオ音源を挿入でき、トラック毎に独立してループが再生されます。

再生するとテンポや長さの違いに関係なく自動でタイミングを調節し、マスターテンポに準じてループが再生されます。

また、各トラックではボリュームやパン(音の位置)を調節でき、ミックス作業もこの画面で行います。



←メイン画面左上でマスターテンポを設定します。

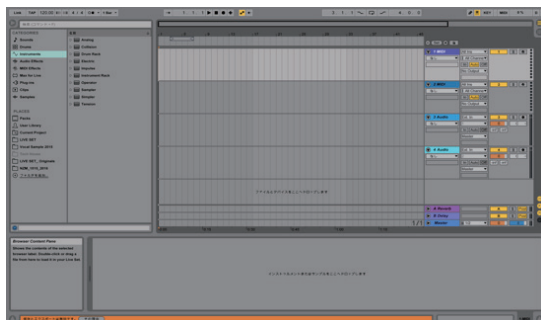
数字の部分を上下させてお好みのスピードに変更できます。

※付属のオーディオ素材は130BPMで設定されています。

・アレンジメントビュー

MIDIクリップやオーディオクリップを並べて楽曲のアレンジ作業をする画面。クリップを並べることで曲を構成し、実際の作曲はこちらの画面で行います。

上記のセッションビューとも同期しており、セッションビューで再生されたクリップと一緒に曲を再生することも可能です。



■MIDIの打ち込み

ここでは内蔵音源を使って、実際にMIDIを打ち込んで行きましょう。

1. 「Drum Rack」を使ってドラムパターン作成

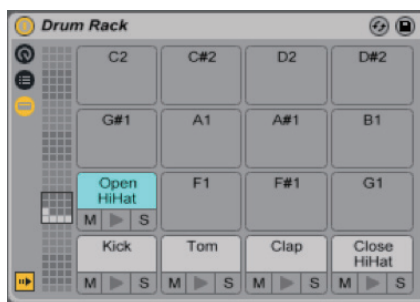
画面左のツリーから「Instruments」→「Drum Rack」を選択します。

「Drum Rack」に用意された16個の-slotの中にはそれぞれサンプル音源をアサインできます。



2. 付属のサンプル音源を各スロットにアサイン

左画面を参考に付属の音源「オーディオ素材」の「Drum」ファイルから「Kick」や「Clap」をドラッグ&ドロップしてみましょう。



3. 音量の調整

「Drum Rack」画面の左側にある小さな●ボタン(図左)を押すと各素材のボリュームやパンが調節できる画面(図右)が表示されます。



4. MIDIを打ち込む

上記でアサインしたオーディオ素材を使ってMIDIパターン(ドラムパターン)を作成してみましょう。「Drum Rack」を読み込んだMIDIトラックの空クリップをダブルクリックするとMIDIの打ち込み画面(ピアノロール)が表示されます。

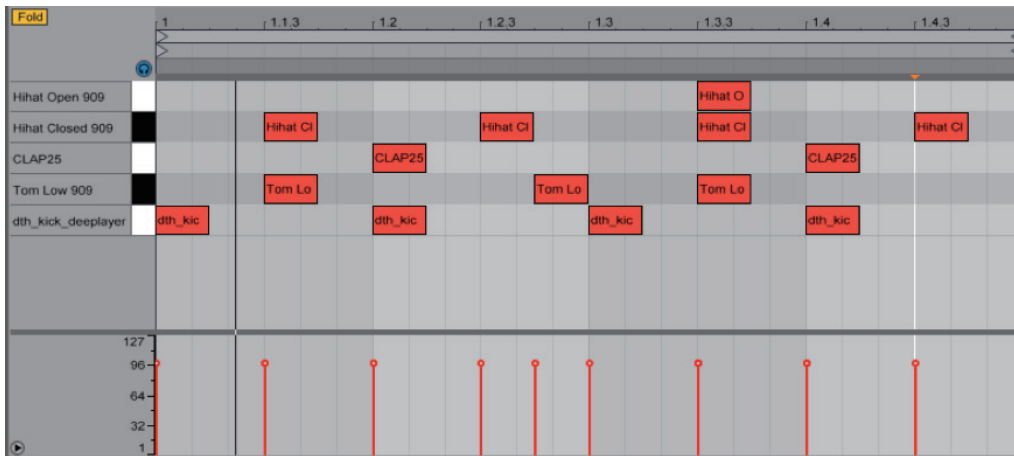
ピアノロール画面内をダブルクリックすると横長のバーが表示され、再生するとそのバーの位置通りMIDIが再生されます。
右図のように入力してみましょう。



- ※1. 上記画面の小さな青丸ボタンを点灯させるとノートに触れるたびに音が発音されます。
- ※2. 画面左上の「Fold」という黄色いボタンが点灯している場合は、消灯させておくことをお薦めします。

5. ベロシティーで強弱をつける

図の様に入力できたら、ベロシティーという機能を使って音に強弱を付けていきます。



上図のままでも構いませんが、強弱を付けることで音に抑揚を与えることができます。縦長の棒の先端をクリック(長押し)すると棒を上下に動かすことができ、強弱をつけることができます。

下図の様に、色が赤いほど音が強くなり、ピンクになるほど音が弱くなっていきます。



■ベースラインの打ち込み

ここでは内蔵音源を使って、実際にMIDIを打ち込んで行きましょう。

1.「Analog」を選択

画面左のツリーから「Instruments」→「Analog」を選択します。

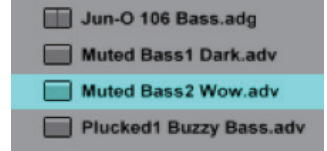


2. プリセットを選択

「Analog」の左側の三角形ボタンを押すとプリセットが表示されます。

「Muted Bass 2 Wow.adv」を選択してみましょう。

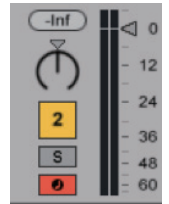
画面下に「Analog」が表示されます。(下図)



3. キーボードで「Analog」を発音

Ableton Liveでは鍵盤の代わりにパソコンのキーボードが鍵盤の代用になります。

右画面の様にトラックの下側の赤いボタンを点灯させ、キーボードのいずれかを押すと「Analog」が発音されます。



4. ベロシティーで音色を調整する

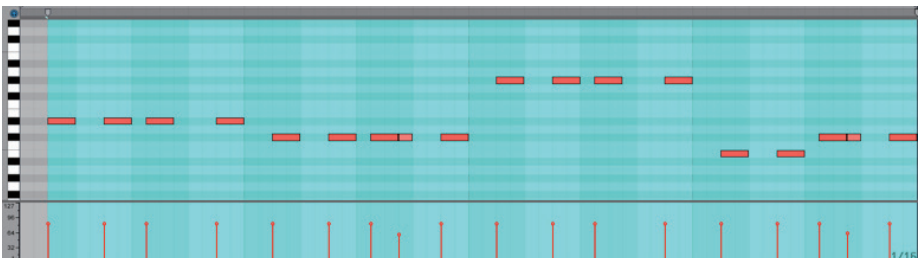
上記のドラムパターンと同様にベロシティーを加えてみましょう。音が変化していくことが確認できます。

お好みの強さに変更してみましょう。

上記の「Drum Rack」と同様に「Analog」を読み込んだトラックの空クリップをダブルクリックし、MIDIの打ち込み画面を表示させます。

下画面の様にピアノロールを入力してみましょう。(最初のノートはD#です)

再生すると先ほどの「Drum Rack」と「Analog」が同時に再生され、ドラムとベースが完成したことが確認できます。



■オーディオ素材を使用する

ここでは、付属のオーディオ素材を使ってメロディーやパーカッションを加えてみましょう。

1. 上モノ素材(メロディー素材)を加える

付属のオーディオ素材「E.Piano」「Lead」「Voice」を使って、先ほどのドラムとベース音源に上モノ素材を加えてみます。チャンネル3、4はオーディオトラックになっているので、空クリップにオーディオ素材をドラッグ&ドロップします。クリップ左の三角ボタンを押せばループ再生が始まります。ドラムとベースにタイミングを合わせて再生してみましょう。

2. パーカッション素材を加える

同じく付属のオーディオ素材「Percussion」を差し込みんで再生させます。

※オーディオトラックが足りない場合は、画面上のポップアップ・メニューから「作成」を選び、「オーディオトラックを挿入」でトラックが追加されます。

■シーンで同時再生させる

Ableton Liveにはクリップを一斉に再生する機能が付いています。

ここまで作ったクリップを横一列に並べ、画面右側の「Masterトラック」下部のシーン再生(三角ボタン)を押すと横一列のクリップが一斉に再生されます。



■音量を調節する

現在複数のトラックから音が出ていると思います。

セッションビューのボリュームやパンを使って音のバランスを調整してみましょう。



■エフェクト効果を加える

センド・エフェクトとインサージョン・エフェクト

Ableton Liveには様々なエフェクトが用意されており、使用すればより深みのあるトラックに仕上がります。

ここではエフェクト効果を加える2つの方法を紹介します。

1. インサージョン・エフェクト

各トラックに直接エフェクト効果を与える方法。トラック毎の細かな設定が可能になるので、繊細なミックスに向いています。反面、パソコンのパワーを消費してしまうので、スペックに余裕の無い方は程々に。

2. センド・エフェクト

ひとつのエフェクトを全てのトラックに対して使用する方法。

細かい説明は省略しますが、トラックのボリューム・フェーダーの上にある「A」と「B」というノブにはそれぞれReverb(リバーブ)とDelay(ディレイ)が用意されています。

ノブを上げるとエフェクトの量が調節できます。

先ほどMIDIトラックで作ったベースとオーディオ素材「Percussion」と「Lead」にSENDエフェクトを加えてみましょう。

「B」のノブ(ディレイ)を適当な量まで上げてみてください。

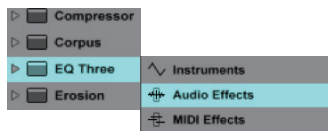
それぞれにディレイが加わったことが確認できます。



■「EQ」で高音、中音、低音を調整

ミックスの基本中の基本「EQ」を使って音を更に調整しましょう。

画面左の「Audio Effects」から「EQ Three」を選択します。



3つのノブはそれぞれ「低」「中」「高」の音を調節できます。音が大き過ぎる音域や、音が足りない音域をこのEQで調節して

いくことで、よりスムーズにミックスすることができます。



■アレンジメントビューで曲をアレンジ

前述の通り、Ableton Liveには2つのメイン画面があり、パソコンのキーボードの「tab」キーを押すか、「Masterトラック」右部にあるアイコンで画面を切り替えることができます。



■トラックを並べる

ここでは、付属のオーディオ素材を使ってメロディーやパーカッションを加えてみましょう。

1.「tab」キーを使ってトラックを移動

先ほどセッションビューで作成したクリップをアレンジメントビューに移動させます。クリップをマウスで長押ししながらパソコンの「tab」を押すとアレンジメントビューに切り替わります。

適正なトラックにクリップをドラッグ&ドロップします。

2. セッションビューで再生したループを録音

セッションビューでループを再生させながら画面上部のトランスポートパネルの録音ボタンを押します。

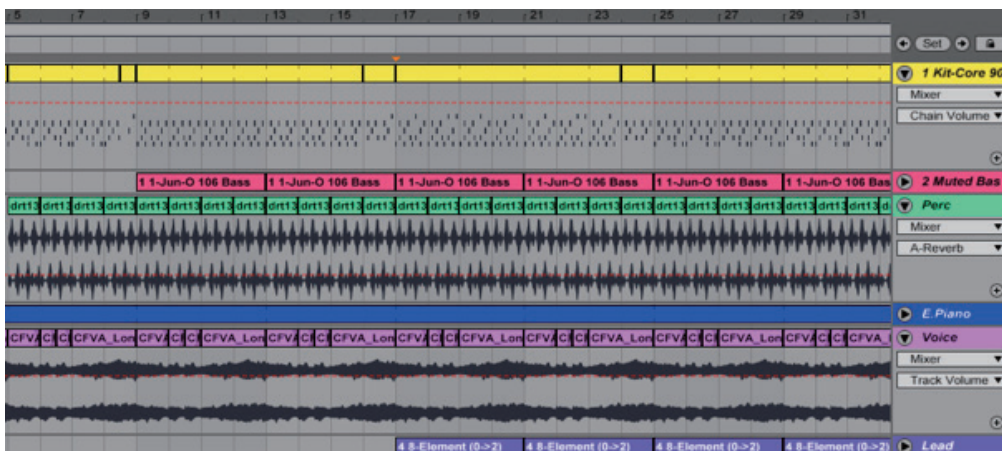
適当な長さを録音したらアレンジメントビューに切り替えてください。アレンジメントビューにクリップが反映されていることが確認できます。



■アレンジを作成

クリップを並べて行くと以下のような画面になっていくはずですが。

見た通りクリップがある位置では音が再生され、何も無いところには何も再生されません。アレンジにルールは無いので、ご自身の感覚で好きなように並べてみましょう。



■曲をオーディオに書き出す

ある程度曲が完成したら、オーディオファイル(WAVやAIFF)に書き出しましょう。

市販の曲のようにCDにしたり、携帯などで曲を聴けるようになります。

アレンジメントビュー画面上段には横長のバー(ループバー)があります。

両端の三角形を掴むと、任意の長さに伸ばすことができるので、曲の開始地点と終了の地点までバーを伸ばします。



↑ループバー アレンジメントビューでループ再生を行う場合もこのバーを使用します。

1.画面左上の「ファイル」から「オーディオをエクスポート」を選択します。(下図左)

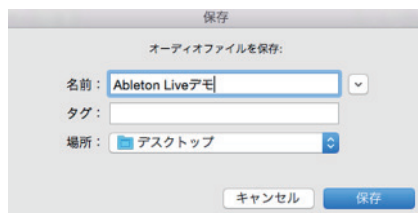
2. 右画面の「オーディオ/ビデオをエクスポート」という画面が表示されます。

ここでは「WAV」で書き出してみましょう。(下図中心)

3.「ファイルタイプ」から「WAV」を選択し、「ビットデプス」を「16」に変換します。

4. 画面下の「エクスポート」を押すとオーディオの書き出し先(保存先)と名前を決める画面が出てくるので好きな名前と書き出し先を選択し、「保存」ボタンを押します。

オーディオの書き出しが開始され、指定した書き出し先に曲が保存されたら完了です。(下図右)

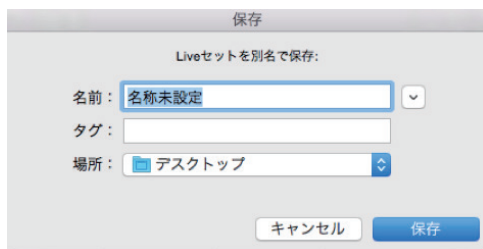


■曲をセーブする

ここまで作成した曲をセーブ(保存)しましょう。

画面左上の「ファイル」から「Liveセットを別名で保存」を選択します。(下図左)

下図右の「名前」の欄に任意のファイル名を入力し「保存」を押せばセーブ完了です。



駆け足でしたが、以上がAbleton Live 9 Liteの基本的な使い方です。

この他にも様々な機能が用意されているので、上記のMIDIのパターンや内蔵音源、付属のオーディオ素材に変更を加えて、自分なりに色々工夫してみてください。

また、楽曲制作以外にもAbleton Liveは文字通り「ライブ」を行うことにも特化したアプリケーションです。

セッションビューを使えば、楽器演奏と組み合わせたり、工夫すればDJプレイにも対応したり、可能性は多岐に渡ります。



記載されている製品名や会社名は、すべてそれぞれの所有者の商標または登録商標です。